

一般研究・共同研究

ウォー、グリーンと宗教（1）

鈴木 繁 一

イーヴリン・ウォー（1903—1966）とグレアム・グリーン（1904—）は、英国国教会を離れローマン・カトリシズムに改宗した現代英国作家の中で好対照の二人と見られている。生年がわずか一年違いの彼等は同じ頃オクスフォード大学に学び、ウォーの自伝 *A Little Learning* によれば、面識はあったようだが交際はまだなかった（200）。改宗はともに二十代であった。作家同士としての関わりから友人となり、殊に第二次世界大戦後親交が深まった。このように共通点の少なくない二人であるが、ウォーは島国英国の頑迷な保守主義者のイメージを好んで作って行き、グリーンは時局的な問題を追って世界の各地に飛び、次々と問題作を発表した。カトリックとしての態度にもかなりの違いがあり、ウォーのカトリシズムを‘so orthodox’（Greene 170）と評しているグリーンは聖体拝領をやめてしまった（Greene 172）。グリーンは *The Heart of the Matter* を評して、ウォーはその中心的アイディアを「何ともしまりのない詩的表現か、でなければ狂気の瀆神である」（‘Felix Culpa?’ 365）と難じたのであった。

当共同研究の一部として、私はこのように興味深いウォー、グリーンの関わりと、彼等と宗教について、概観し報告したいと考えている。それには各々の自伝・伝記的資料の語るところを見、さらに各々の作品の宗教的特質を見なければならぬであろう。本稿では、ささやかながら、ウォーの自伝 *A Little Learning* により、共同研究のテーマに関する限りにおいて彼の家族的・宗教的背景を見ることとしたい。

ウォー家の祖先はスコットランド南東部のパーウィクシャーに農場を持っていた。イーヴリンの曾祖父の父アレグザンダー・ウォー師（1754—1827）はスコットランド分離派教会の牧師で、1782年ロンドンのチャペルに派遣され終生その職にあり、優れた説教家であり、貧しい教会員やロンドンのスコットランド出身者に尽くした人望家であった。トマス・カーライルが若い頃彼の説教を聞いたことを書いた手紙が引用されている。（4—8）

母方の祖父の母セオドシアは、直系の先祖でただ一人カトリックであった点でウォーの興味を引いている。彼女の家族はアングロ・アイリッシュのプロテスタントであったが、彼女は孤児となり、夫を捜すためインドへ送られて最初の結婚をし、イーヴリンの祖父を産んだ。アングロ・アイリッシュのプロテスタントがカトリックに改宗するのは尋常のことでなかった。彼女が信仰深かったのではなく、再婚した相手がカトリックだったのではないかという。当時カトリックは陰険であると見られ、セオドシアの亡夫の姉妹は、母親の改宗のためイーヴリンの祖父を引き取ってしまった。（3—4）アレグザンダーは信念に生きた人、セオドシアは身を運命に委ねた人であったと言えよう。彼等は、往時の英国社会におけるそれぞれの立場の代表と平均であった。

アレグザンダーの息子でイーヴリンの曾祖父にあたるジェイムズ・ヘイ・ウォー師は、三十代の終わりまでビジネスをしていたらしい。彼はスコットランド分離派教会牧師の父や、スコットランド出身の資産家の義理のおじが（遺産を残して）死んだ後、英国国教会に転じた。（14—16）この言うなれば転向についてのウォーの書き方は興味深いが、ジェイムズ・ヘイ・ウォーに抱負と信念があったのであれば、彼の決断は現実的であっても機会主義的とは言えないであろう。彼は国教会信者の事務弁護士の娘を娶り、オクスフォードに行きモードリン・ホールに通い、普通より二十年遅れて聖職につく勉強をした。ちょう

どオクスフォード運動が盛んな時であり、それを彼はどう受けとめたであろうか。ウォーは次のように記している。

彼はトラクテアリアンたちの盛時にオクスフォードへ行った。そして国教会牧師になる勉強をしたが、運動首唱者たちの直接的影響は受けなかったようだ。彼はニューマンやピュージより年長であった。彼等が説教するのを聞いたと思われるが、説教壇での彼自身のスタイルは、もっと以前のより散文的でより雄弁術的な手本によっていた。彼の宗教には、むしろ、ジョンソン博士流の男性的なトーリー党高教会派的なところがあった。(16)

彼は初めドーセットの教会区に赴いたが、三年後、バースに近いコースリーの教会区に移り、以後、生涯をそこで送った(16—20)。地方教会区の家父長的牧師として堂々たる一生であったようだが、本稿での興味は、ウォー家の先祖が彼の時にアングリカンになったことにある。

ジェイムズ・ヘイ・ウォーの息子でイーヴリンの祖父であるアレグザンダー・ウォーは、バースに近いミドサマー・ノートンで医者として一生を送った。彼は外面はよかったが家庭では暴君であった。(20—23) ウォーはこの祖父にも祖母にも会ったことはなかったが、彼等の死後、未婚の三人のおば達がその家に残って日曜日にバイブル・クラスを開いていて、彼はこの家に滞在するのが好きであった。

イーヴリンの父アーサー・ウォー(1866—1943)が、チャプマン・アンド・ホール社の専務取締役を勤めた文人であったことはよく知られている。イーヴリンが生まれた時、アーサーの家庭はロンドン北西のハムステッドにあり(27)、イーヴリンが4才の時、アーサーは同じハムステッドのノース・エンド村に家を建てて移り(34)、二十五年ばかりもそこで暮らすことになった(42)。アーサーは他の孫たちと同じく祖父ジェイムズ・ヘイ・ウォー師から洗礼を受けたし、コースリーに何週間も滞在することが珍らしくなかった(20)。彼は自伝

One Man's Road に、自分が19才の時に亡くなった祖父のことを、思い出を交えて詳しく書いているという。イーヴリンが曾祖父のことを書く時も、これによっているのである。(14) アーサーは祖父の生活に十分親しんだはずである。そしてアーサーの宗教について、ウォーは次のように記している。

宗教の面では彼は実践的国教徒であって、欽定英訳聖書と克蘭マーの祈禱書の聖句を愛好した。多彩で儀式ばった礼拝が好きで教会通いを好み、日曜には欠かさず、どこにしようと最寄りの教会へ、その神学的立場に構わずに行くのだった。一時、私が生まれた頃、彼が短期間アングロ・カトリックだった時期があり、その運動の中心であったキルバーンの聖オーガスティン教会（私はここで洗礼を受けた）に何度も通ったが、そこで教えられた教義を彼が本当にまじめに受け取ったことは一度もなかった。その教会員の一人で知りあいの事務弁護士が、贖罪のための苦行として副牧師から笞打ちを受けたことで、彼はひどく陽気にはしゃいだものだった。私の子供時代、父母は毎朝お祈りを朗読した。1914年8月、「これ以上は役に立たん」という奇妙な理由で父はこの習慣をやめた。カトリック教徒に対する彼の不平は、彼等の教義の明快さであった。彼が自分の信ずる教義について、純粹に知的な確信を得ていたかどうか私には疑わしい。不死の可能性について、彼は漠然とした観念的黙想に耽るのだった。子供の時の教育によって与えられた道徳規範を、彼は疑うことなく受け入れていた。

(67—68)

カトリックの「教義の明快さ」、人が自分の信ずる教義について「純粹に知的な確信」を得るかどうかといった事は、ウォーが自分の改宗について語る時の重要な事柄である（‘Come Inside’）。アーサーは、尊敬を集めた牧師の平信徒の孫として、そして知識人として、宗教生活の習慣を受け継ぎ、宗教に対して標準的と言える範囲の敬意と関心を持っていたようである。

イーヴリンの母キャサリンと上記以外の先祖について、本稿のテーマに関する重要事は見出されない。スコットランド出身の牧師の家族であったウォー家における曾祖父の国教会帰依、祖父以来の平信徒化ということは、イングランドの堅実な中流家族の尋常の宗教的経歴に属すると言わねばならない。

2

次はウォー本人のことに移ろう。彼の洗礼名 Arthur Evelyn St John の中に聖人の名があるのは、高教会派の教父が聖人の名をつけることを主張したため、意味深いものではないとのことである (27)。

ウォーが8才の時まで、ミドサマー・ノートン近郊の村から来たルーシーという保母がつけられた。彼女はまじめな非国教徒プロテスタントで、六ヶ月をかけて聖書を始めから終わりまで読むことを繰り返すのであった。(29—30) ウォーは彼女に連れられて近隣の邸での礼拝にきちんと出席したが、そこでの説教は、非国教徒のルーシーにも十分受け入れられるものであった (91)。

ルーシーが去って後は、両親と共に教会へ通った。そしてウォーに教会熱の一時期が訪れる。11才の時ハムステッドの聖ジュード教会で、彼はアングロ・カトリズムに興味を覚えるようになった。牧師のバジル・バウチャーは真正のアングロ・カトリックから見れば型破りの人物で、ウォーの父の冗談の種であった。彼はカレンダーにかまわず気分が乗れば祝祭を行なうのであったが、「祭儀におけるバウチャー氏の突飛なさまざまな行動にもかかわらず、重要な儀式のあることを私はいま見た。」(91—92)

ミドサマー・ノートンに滞在した時の教会通いは大きな喜びであった (52)。そこで親しくなったある副牧師は後にカトリックとして死んだ人で非常に敬虔であったが、若かった当時極端に典礼を重んじていた。彼は聖体拝領台で待者を勤めることをウォーに教え、ウォーはそうすることに深い喜びを覚えた。(92)

「……私は聖象徴物の近くにいること、明るい早朝の静けさ、そして執り行なわれている儀式に密接した感覚が嬉しかった。」(93) それからしばらくの間、ウォーは聖人や天使の絵を描き、国教会の装飾や位階に強い興味を持ち、子供部屋に聖人像を祀ったりすることが続いた。ニューマンの *The Dream of Gerontius* に感銘を受け、死の直後の靈魂の経験を描いた *The World to Come* というつたない詩を書いた。しかしいずれは聖職につきたいと言い出し、長い祈禱を唱えるようになると、母は夕べの祈りの朗唱を聞いてくれなくなった。これらはホビーではあったが、それだけの意義のものではないとウォーは考えている。「神はさまざまな声で語り、無数の姿で現われる。……後年もっと冷静に、しかし極めて不完全に理解することになった真理をこうして暗示されたことを、全くの空想として退けるならば、不躰であり思知らずであろう。」(94)

ウォーは地元の小学校に通っていたが、パブリック・スクールに行く時が来た。父や兄アレックと同じシャーボーン校に行くことは、アレックが学校生活を小説に暴露的に描いたため不可能となり、イーヴリンが信心のあることを示した時期であったので、高教会派の教育を特に聖職者の子弟にほどこすという趣旨で創られた、ブライトン西方のショーラムにあるランシング校が選ばれ、1917年5月入学した。(96—97) チャペルでの朝夕の礼拝はウォーの心を捉えた。礼拝は典礼主義的ではなく、「すべてトラクテアリアンの精神で運ばれていた (112)。」

クリスマスに家に帰ると兄の婚約者が滞在していた。彼女の父の作家 W. W. ジェイコブズの家はロンドン北方のバーカムステッドにあり、この時から二年間ウォーは何度も訪れた。バーカムステッドには知られた男子校があり、ジェイコブズ家の長男はそこに通ったが、他ならぬグレアム・グリーン之父がその学校の校長であった。ウォーは、バーカムステッドで参加したパーティーで一度もグリーンに会わなかったが、グリーンの小説中のランシング校出身の

人物たちは、グリーン気づかない過程によって、間接的に自分が原因になったのかも知れないと書いている。(116—20)

ランシング校時代に、やがてウォーはアングロ・カトリシズムから離れて行った(127)。以前はチャペルでの礼拝や休暇のとき出席したもっと儀式だった礼拝式に喜びがあったが、

あのようなものへの興味は過ぎ去って再び戻らなかった。後に私がカトリックになった時、それは典礼の魅力のためではなかったし、カトリックの典礼の詳細に特別な興味を持ったことは全くない。ランシングがいやになるにつれ、たいていの学校以上にカリキュラムに組み込まれていたチャペルがいやになった。(141)

彼は教会的なものすべてへの興味を失いつつあった。ランシング校での最後の二年間、彼はキリスト教の知的基盤について熱心に討論した。宗教教育を非常に重視する学校ではあったが、キリスト教弁証学の授業は皆無と言ってよかった。数多くの弁論部で、「我々のハウスは靈魂不滅を信じていない」といった月並みな懐疑的論題が次々と出され、「自分で考える」よう奨励されると、生徒達はたいてい否定的結論に達した。客員として来た大学教師は、イエスは自分が神だと知っていたか、等々の問題を紹介した。少年向け読み物の中の、「神は何のためにその子を遣わしたのか？ なぜ彼は自分で来なかったのか？」という論点は、無神論を論証するように思われた。ウォーの関心はポウプの『人間論』からライプニッツの哲学へ、さらに啓蒙主義へと移って行った。六年生の半数は公然たる不可知論者か無神論者であり、ウォー自身、自分は無神論者になっているが一時的なものだろうと日記に書いた(13 June 1921)。彼はこうしたことを、大人である教師達には退屈な思春期の懐疑として振り返っているのであって(141—44)、深刻に取り扱うことは適当でない。靈魂死滅の願望や自殺を考えたことが日記に記されているが(26 June, 19 July 1921)、人生に

ウォー、グリーンと宗教（1）

倦んだ生徒達で‘Corpse Club’を結成し、部長としてアンダーテイカーと称したりしたのであった（138）。後年ウォーが改宗に際しての「知的確信」を語ることはすでに触れたが、ランシング校時代は、はしかのような典礼趣味を脱し、未熟ながらも宗教への知的確信を求め始めた彷徨の時期であった。

引証資料

- Greene, Graham. *The Other Man: Conversations with Graham Greene*. With Marie-Françoise Allain. Trans. Guido Waldman. London: The Bodley Head, 1983. Originally published in French as *L'Autre et son double*. Paris: Belfond, 1981.
- Waugh, Evelyn. ‘Come Inside.’ *The Essays, Articles and Reviews of Evelyn Waugh*. Ed. Donat Gallagher. London: Methuen, 1983. 336–68.
- . *The Diaries of Evelyn Waugh*. Ed. Michael Davie. London: Weidenfeld and Nicholson, 1976.
- . ‘Felix Culpa?’ *The Essays, Articles and Reviews of Evelyn Waugh*. 360–65.
- . *A Little Learning: The First Volume of an Autobiography*. London: Chapman & Hall, 1964; London: Methuen, 1983.